

## 編集後記

批判の眼を自己に近いものに向けるということが、具体的な問題において人間を考へるということである、というようなことが言われる。確かに理念とかイデオロギーとかが、人間に何らかの働きをもつためには、具体的なことが要せられよう。しかし近いといつても、その眼が外に向いたものである限り、自己にとつては、遠いものと云わざるを得ない。しかれば眼を内に向ければ、一番近いものが見えるかと云えば、これまた近いと思つたものが実はなかなか近づきたい。つまり本当の自己とは何か、という問いは、世界を改革しようとする時の困難さよりも、気づきにくく、見られにくい障得によって蓋われていて、容易に明らかにならない。

自己が本当は如何なる自己でありたいのか、如何なる社会を願っているのか、ということは一応ぼんやりと分つたやうでいて、具体的な場所において考えれば、実は何も分っていない。何らかの形で、自己を喪失した願望とか希望とか欲望として自己解釈しているにすぎない。自己

と思いつつ自己ならざるものを追ひ、自己の願ひと思いつつ、他物の為に馳せ使われている。仏道の眼からいへば、自己疎外ということは、人類の歴史と共に始つたことである。

一方で原水爆の危機が叫ばれ、一方で蛋白質の合成(生命の合成の第一歩)が可能な時代において、人間とは何であるのかという問ひの出発点をもう一度はつきりさせる必要があると思われる。

さて本号は、学外より名大の上田義文先生と、東大の脇本平也先生の論文をいただきました。上田先生の「親鸞の『往生』の思想」は、種々の都合で「同朋学报」と同時掲載になりました。なお、次号に後半を掲載する予定です。先生は大乗仏教の本流を、親鸞の往生についての考え方の上に再発見されている。往生という動的な概念を、曾我先生の最近の考えと照合してみると味い深い所です。

脇本先生には、明治において仏教を実践し求道の態度ということ身を以て教えて下さった清沢満之先生について、先生の思索の基礎にあるような問題意識を探られ、貴重な御研究の成果を御寄稿いただきました。

(本多)

昭和43年11月10日 印刷  
昭和43年11月20日 発行

親鸞教学 第13号 250

京都市北区小山上総町22

大谷大学真宗学会

親鸞教学編集部

発行人 広瀬泉

大谷大学真宗学研究室 振替 京都 8225番

京都市中京区寺町通三条上ル

文栄堂書店

振替 京都 2948番

京都市下京区七条御所ノ内中町50

中村印刷株式会社

電話 (313) - 0468番

編集  
発行

発売

印刷